ゼロの使い魔～純白の姫騎士～

黒騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔～純白の姫騎士～

【Ｎコード】
Ｎ６８８２Ｗ

【作者名】
黒騎

【あらすじ】
死んで神からチート過ぎる能力を貰った主人公がハルケギニアに旅立ち、チートな国と軍を作る物語

第一話　プロローグ（前書き）

この作品が初執筆初投稿になります。間違い等が有るかもしれませんがどうかよろしくお願いいたします。

第一話　プロローグ

「・・・何だ、此処は」

気が付いたら私は何処までも白い空間に居た。だが、そこで突然誰かの声が聞こえた。

（おや、もう気が付いたのかい？）

「誰だ？何処に居る？」

私は周りを見るが誰も居なかった。

（私はそこには居ないよ。君の頭に直接語りかけているんだよ。）

頭に直接か、もしかしてこの方は神様みたいな存在かな？

（うん、神様で合ってるよ。良く分かったね）

「勝手に心を読まないで下さい。で、此処は何処で、何故私はこの様な所に居るのですか？」

（此処は天国と地獄の狭間で、君が此処に居るのは此方のミスで君が死んでしまったので私が君を此処に転送したんだ。）

私はその言葉を聞いて殺気を込めて呟いた。

「・・・ほぉ、ミスのせいで死んだしまったと？」

（私がやった訳では無い、だから頼む、その凄まじい殺気を抑えてくれ。）

「ミスった者を出してくれませんか？」

（今は無理だ。理由は地獄に居る閻魔大王の元で１０００年間、教育指導する事になって今は地獄に居るからね）

なるほど、十分に罰は受けているという事か。なら良いだろう。

「それで？私はこれからどうなるんですか？」

（君には転生するか、このまま天国に行くかのどちらかを選んでもらう。）

「もちろん転生を選ばさせて頂きます。で、何処に転生させてもらえるんですか？」

（ゼロの使い魔の世界だ。ちなみに原作破壊はしても大丈夫だ。）

神様がそう言うと、目の前に赤色の箱が突然出てきた。

「これは・・・何の箱ですか？」

（これは能力を決めるために用意した物で能力を決める物だ。ちなみに能力は三つまでだ。あの世界は力が無いと腐った貴族に殺されるかもしれんからな。忘れていたが容姿はランダムで決まるから文句を言わないでくれよ。）

私は話を聞いた後、箱から三枚のカード引くと、そのカードが手元から消えた。

（それじゃ～今引いたカードの発表だ。能力は『全知全能』『不老不死』『女神の祝福』この三つだ。これ、チート過ぎね？）

「確かにチート過ぎますが、それは私の運が良かったからです。で？『女神の祝福』とは、どんな力なんですか？」

（簡単に言えば、手で触れるだけでどんな病気や怪我、そして呪いを治したりする力で、この力を使いながら歌うと広範囲で同じ様に治ったりする便利な力だ）

「能力については大体把握しました。で？私はゼロの使い魔の何処に送られるのですか？」

（トリステイン北西部の沖合にある三つの島からなるトリステイン王国領オーシア諸島を治めている貴族に転生してもらう。）
「オーシア諸島？ある程度原作を読んだ事はありますが、そんな島は無かったと思いますが？」
（私が作った島だ。そこを拠点に平民のための国を作ってもいいぞ。ちなみに資源は豊富だぞ。）

確かにハルケギニアの平民の扱いは酷いからな、第一目標は軍を作り、第二に国家を作る事に決定だな。

（納得したみたいだから今から送るぞ。）

私はその言葉を聞いて一歩横にずれると、さっきまで立っていた場所に大きな穴が開いた。

「・・・ほぅ、死にたい様だな。」

私はありったけの殺気を込めて言い放った。

（申し訳ございませんでした。目の前にゼロ魔の世界に行くための扉を用意しました。・・・だから・・・その・・・とにかくゴメンナサイ！！）

私はその謝罪を無視して扉を開けこの空間から消えた。

（お願いだから何か言って～～～～！！）

第二話　家族

「ばぁぶ？（ここは？）」

目が覚めると私は見慣れぬ部屋に置いてあるベビーベッドに寝かされていた。

「だ、だぁぶ、ぶぁ？（体が思うように動かん）」

私がなんとか体を動かそうとしていると、ベットの傍に女性が現れ私を抱き上げた。

「あなた見て起きたわ。ふふ、何度見てもかわいいわ」

「当たり前だ、私達二人の子供なんだから」

どうやらこの二人が私の新しい両親の様だ。父の容姿は簡単に言えば金髪碧眼の凛々しい方で、母の容姿は髪が銀色だがＦａｔｅのセイバーによく似ている。

「あなた？この子に付ける名前は決まったのですか？」

「我がオーシア家の嫡男だ、当然名前ならもう決まっている。この子の名前はレイ・レナード・ド・オーシアだ」

「レイ・レナード・ド・オーシア、良い名前ね。レイ、生まれて来てくれてありがとう」

こちらこそ良い名前を付けて頂きありがとうございます。と、心の中で感謝していると、強烈な眠気に襲われそれに逆らう事が出来ずに寝てしまった。

私が転生してから三年が経ち順調に育っている。ある事を除いて。ある事、それは父と母の血を綺麗に半分ずつ引き継いだせいか見事に容姿がＦａｔｅのセイバーになってしまった事だが諦めるとしよう。

私はあまりすることが無いのでこの三年間で出来る限りの情報を集めた結果、ド・オーシア家の事をある程度を知ることが出来た。

まずド・オーシア家の階級は伯爵で、領地はトリスティン北西部に有りオーシア諸島の他にも最近、大きな島を領地として貰ったらしいがオーク鬼等の危険な亜人や幻獣が住み着いているため、宮廷貴族の嫌がらせだ、と言われています。さらに、トリスティンとゲルマニアの国境沿いにあるため領軍にもお金を掛けないといけないが、ド・オーシア領が農業を中心にある程度発展しているおかげで、ド・オーシア伯爵家は他の貴族の様に借金をせずに済んでいるそうです。

次に家族の紹介をさせて頂きます

父の名前はイオビス・ザーランド・ド・オーシアで伯爵家の現当主魔法のクラスは土のスクエアで、父はクリエイト・ゴーレムが特に優れているらしく二つ名は『一人軍隊』

母の名前はカナリア・ベルティーヌ・ド・オーシア
魔法のクラスは水のトライアングルで、治療魔法のヒーリングや秘薬の製作が得意で二つ名は『睡蓮』で父が付けたらしい。
ちなみに父との出会いは魔法学院で母を見た父が一目惚れしその場でプロポーズされた時らしく、その時は驚きのあまり了承してしまったらしいが、今では父にベタ惚れだ。

何故断言できるかって？今現在、テーブルを舞台に、私の目の前でピンク色の空間をこれでもかと展開しているからだ。だが、これ以

上この空間が続くと朝食が甘くなってしまうのでここはバッサリと断つ事にした。

「父上、母上、これ以上この空間が続きますと口から砂糖を吐いてしまいますのでやめて下さい。イチャイチャするのは後で二人だけの時に出来るでしょう？」

「「ちっ！」」

舌打ちされた！？

第三話　バグキャラ？

「あ～暇だ」

私はそう言いながら今まで読んでいた絵本をテーブルの上に置いた。
転生してから三年で私は既に普通に喋ったり、字を読んだり書いたり出来る様になったので、私の両親は「「この子は天才だ！？」」と、その都度自分の事の様に喜んでくれた。

話を戻そう。

この世界の字は『全知全能』を使うと簡単に知る事が出来きたが、貰った力に頼り過ぎ、自惚れてしまう事を怖れた私が、自分の力で学び考える事が出来る様に必要な時以外能力をＯＦＦにする事にし

たのだ。絵本は読む事はその一環で父や母に買って貰い読んでいたが、字を覚えた今では家に有る絵本を読み尽くしたため、かなり暇だ。・・・・よし、執務室に行こう。

ーーーーーーーー執務室ーーーーーーーー

コンコン

「誰だ？」

「父上、レイです」

「おぉ、レイか。入りなさい」

「はい、失礼します」

「レイがここに来たのは初めてだな」

「はい、初めてです。こちらに来たのは、父上に頼みたい事が有るからです」

「レイの頼みたい事とは何だ？」

「絵本は全て読んでしまったので、書庫の本を読ませて頂きたいのです」

「そうか、三歳の子供では普通は無理だが、レイだから大丈夫だろ。よし、書庫の利用を許可する。あ～、それとお前には四歳になったら魔法を学んでもらう。」

へっ！？普通は五歳から六歳からじゃないの？

「四歳からでは早すぎませんか？」

「お前の成長を見て、私とカナリアが四歳から、と決めたんだ。それにレイだからな」

「はぁ～、分かりました。では、失礼しました。」

あれ？俺ってまだ能力を使って無いのにバグキャラ扱いされてる？

第四話　プラン

あれから一年が経った。

この一年、私は書庫で魔法書以外に農業や経済等に関する本を読んだのだが、やはり技術レベルは地球で言うと中世ヨーロッパぐらいしかない。６，０００年以上もこの状態が続いているのは余りにも異常だ。

「・・・・・・魔法絶対主義とブリミル教の影響か」

さらに最悪なのはブリミル教の異端審問と聖戦だ。ブリミル教の異端審問は魔法絶対主義やブリミル教を脅かす者を処刑するためだ。恐らく私がメイジを簡単に殺せる武器や兵器を作り出すと間違いなく異端認定されるだろう。この事から今の武器を少し改良した物は使う事が出来るだろうが、新兵器等は？時？が来るまで使う事はあまり出来ない。使うとしても、見つからない様にしなければならず、新兵器を領軍に配備するのは現実的に不可能だ。

そして、私が最も嫌悪する聖戦だ。

これは私の推測だが、ブリミル教の目的はサハラにある聖地の奪還だが、その裏にはブリミル教とロマリア連合皇国の思惑が見て取れる。ブリミル教とロマリア連合皇国は、人間の魔法ではエルフの精霊魔法に勝てない事を知りながら聖戦を発動し各国の国力消耗を狙ったのだろう。その証拠に歴史書には聖戦後、徴兵した多くの平民を失い、また多くの国庫を使った各国は国力が低下したと書かれている。
考えただけでも腹が立つ。・・・・・・・・・・・・やはり必要か。

「民間軍事会社『国境なき軍隊（ＭＳＦ）』」

『国境なき軍隊』は、主に商隊や商船の護衛、オーク等亜人や幻獣の討伐、国境線の警備を中心に依頼を請け負う予定で、拠点は離島と言う事も有り、人がほとんど住んでいないオーシア諸島にする事に決まっており、神様が言っていたオーシア諸島の資源は戦力拡大に利用するつもりだ。余り信用は出来ないが。
そして、『国境なき軍隊』の主な部隊は二つで陸上部隊と航空部隊に分ける事にしている。
陸上部隊の主な戦力は二つ。

一つ目は攻撃力と防御力に特化したガーゴイルだが、術式を構築し、またその術式にもっとも最適な形状した防具を採用し設計したためか、外見は『ネギま』のＭＭ（メガロメセンブリア）重装魔導装甲兵に酷似している。ガーゴイル名は『ソリドス』

二つ目は機動力と攻撃精度に特化したガーゴイルで、こちらも同じように術式を構築、それに最適な防具を採用し設計。こちらの外見は『ソリドス』とは違うものの、『ネギま』の戦乙女騎士団の騎士団正装に酷似している。ガーゴイル名は『レイテル』

これらのガーゴイルの動力には魔石を利用した魔導エンジンを搭載予定で、既に術式の構築と設計は済んでいる。

魔導エンジンに利用する魔石とは、風石や火石等と同じ様にこのハルケギニアに存在している物で、特徴はメイジが魔法を使う時に消費する精神力に似た魔力を永遠に吐き出す事が出来るためきちんとした術式で制御すれば、簡単に永久機関が作れる等の優れた性質を持っているが、その反面、デメリットも有り、魔石の魔力は人間には使う事が出来ず、制御せずに利用すると魔力が猛毒に変化し周囲に悪影響を及ぼす。昔、あるメイジが魔石の力を利用して魔法を使うとメイジの体が拒絶反応を起こし、内側から爆発した様に破裂しメイジは死亡、魔石が発する魔力は猛毒に変化し、広範囲に影響を及ぼしたため、その土地は百年ほど植物が育たなかったらしく、この事から『悪魔の力が宿る石』、魔石と名前を付けられハルケギニアの人間には恐れられている。

ちなみに魔石の資料がほとんど無かったため、今回は流石に『全知全能』をＯＮにして詳しく調べた。その結果、魔石を安全に制御できる術式を構築でき、安全を確保する事が出来た。

次は、航空部隊だ。
航空部隊の主力は当面、商船の護衛が中心のため海・空の両用艦だけを配備予定で、配備される艦は第二次大戦中に作られた陽炎型駆逐艦を元に再設計したアカツキ級だ。
アカツキ級は大型魔導機関を搭載したため煙突が無くなり、船体や艦橋も出来るだけ空気抵抗を減らす様に再設計した。武装面では２５ｍｍ連装機銃の数は変更せずに、主砲の『１２．７ｃｍ連装砲』を３基から４基に、『四連装魚雷発射管』を２基から１基に変更し、空いたスペースに原作でジャン・コルベールが開発した『空飛ぶヘビくん』を再設計し、名を『一式多目的誘導弾』に変え、『一式多目的誘導弾四連装発射機』として２基を装備した。そのため、配備されればアカツキ級は、ハルケギニアに存在する軍艦の中では最強の艦になるはずだ。
また、そのアカツキ級の支援を目的としたＭＦ－１『ファーン』を配備する予定だ。
『ファーン』は第二次世界大戦の『震電』に魔導エンジンを乗せるために再設計した機体で、各性能が上がり、航続距離は魔導エンジンの影響で機体が故障しない限り飛ぶことが出来る怪物になる筈だ。この航空部隊が見つかればブリミル教と王軍がどのような反応をするか今は解らないが、その時はアカツキ級は新機軸の艦、ＭＦ－１『ファーン』はマジックアイテムだ、と言い訳するつもりだ。

「・・・・・・だがこれはあくまで予定、問題があればプランの変更も必要かもしれないな」

私は全ての計画を書いた資料から目を離しながら、一人呟いた。

「ようやく明日から魔法を習う事が出来る。・・・・・・・・・・そして、明日から始まるこのプランはこのハルケギニアにどのような影響を与えるのだろうな。ふふっ」

私は資料に書かれている文章を呟いた。

「空中都市『オスティア』の建設、及び『オーシア帝国』の建国について」

第五話　初めての魔法と異常事態

今日は待ちに待った魔法の訓練が始まる日だ。私はこの一年間、『プラン』を練りながら魔法書で基本的な事は全て頭に入っているので、予習は完璧。そして、杖との契約も済んでいる。

「レイ、今日からお前の魔法の訓練を始める。他の家では家庭教師等を付けるが、我がオーシア家では、親が子に教える事になっている。そのため、私とカナリアが教える事になる。いいな」

「本音は？」

「金が無い」

そう、オーシア家の財政はかなり切迫しているため、オーシア家の屋敷はそれほど豪華では無いが質素でありながら、どうやって綺麗に見せるか等、色々な工夫がされているぐらいお金の事にはシビアなのだ。今回の魔法の家庭教師を雇わない事も、恐らくその影響なのだろう。そんな苦労のお蔭でオーシア家は借金せずに済んでいるのだが。

「話を戻すぞ。レイ、この一年間、書庫でしっかり魔法の勉強をしたな」

「はい、父上。（すべて暗記したから、最近は『プラン』ばかり練っていますけどね）」

「それでは今日はコモンマジックだけを教えるが、その前に問題だ。コモンマジックはいくつあるかな？」

「レビテーション・念力・ライト・ディテクトマジック・ロック・アンロック・ブレイド・マジックアロー、そして使い魔召喚に使われるサモン・サーヴァントを含めて九つです」

「正解だ。ではレビテーションから始めたいと思うが、その前に魔法を使う際のコツを教える」

「コツ？ですか？」

「そのコツとはイメージだ。魔法を使う時はその魔法のイメージを持って使わなければいけない。しっかりイメージしないと威力や効果が弱くなったり、失敗したりするので、イメージをしっかり持つ様に常に心掛けなさい。解ったな？」

なるほど、それはどの魔導書には書いていなかった。これは良い事を聞いた。

「はい、良く解りました。父上」

「解ったのなら、訓練を再開しよう。≪レビテーション≫」

父上がレビテーションを唱えると地面に置いてあった石が物理法則を無視して浮かび上がった。

「こんな感じに、石が浮かぶイメージをして、唱える。やってみなさい」

「はい、（石が浮かぶイメージ、石が浮かぶイメージ、よし！！）
≪レビテーション≫」

≪レビテーション≫を唱えると私の身体から何かが、杖に流れるのを感じたが、その事は後回しにして魔法に集中すると、石が顔のあたりまで浮かび上がった。

「父上、出来ました！！」

「コモンマジックとはいえ、一回で成功するか。お前には魔法の才能が有るのかもしれんな」

「父上、質問が有るのですがよろしいでしょうか？」

「何だ？」

「はい、実は≪レビテーション≫を唱えた時に、身体から杖に向かって何かが流れるのを感じたのです」

「それはメイジが魔法を使う時に消費する精神力だ。魔法を使っていれば、自然に慣れるのだろう」

その後も、魔法の訓練は続いたが、念力・ライト・ディテクトマジックを一回で成功してしまった。

「一回も失敗せずに成功するなんて凄いわね、あなた」

「ああ、我が子ながら恐ろしい才能だ」

ちなみに、母上は訓練の途中から参加して、父上と共に私に魔法を教えてくれている。

「つぎは、ブレイドとマジックアローだ」

「父上、ロックとアンロックはやらないのですか？」

「それは屋敷に戻ってからも出来るから後回しだ」

まぁ～鍵を閉めたり開けたりするだけだからな。

「ちなみに、ブレイドとマジックアローの二つは、メイジがどの系統かで色が違ってくる。火は赤色、水は水色、風は白色、土は茶色と決まっている。訓練するついでに、お前がどの系統なのか確かめる。イメージは簡単、精神力で出来た剣をイメージすればいい≪ブレイド≫」

すると、父上の杖に茶色の刃が出現した。

「お前もやってみなさい」

「（元日本人には剣より刀がイメージし易いが、ここは無難に剣をイメージした方が良いかも知れないな）≪ブレイド≫」

そう唱えると父上の様に刃が現れた。色は、

?金色?

第六話　癖と父と言い訳

「・・・・・・・・・・えっと、ち、父上、この色はどの系統になるんでしょうか？」

私がブレイドを唱えると、現れたのは色が金色で長さは1メイルほど刃で、さらにその周りにはたくさんの金色の粒子が浮いており、あまりに幻想的な光景につい見惚れながらも父上に聞いてみた。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

返事が返ってこなかった事が気になり、父上と母上に視線を向けると、そこには目を子供の様にキラキラと輝かせている母上と、目を見開いたまま固まっている父上が居た。

父上、驚くのは解ります。そりゃ～息子がブレイドを唱えたら、金色の刃が出てきたんだ、そんな表情になりますよ。問題は母上です。何故そんなにキラキラと輝かせてこっちを見ているんですか？身の危険を感じるんですが？

「よし、今の内に離れてぐぶっ！？」

私は母上の傍を離れようとするが、時既に遅く母上に捕まった。

「レイーーー！！ねぇねぇどうしてブレイドが金色なの！？金色って何系統！？お願いだからもっと見せて！！！」

それを聞きたいのは私の方です！？それに母上、何か幼児退行していませんか！？いつもの凛とした母上に戻ってください。そして早く離れて下さい！？後頭部の辺りにけしからん弾力が！？

「ちょっ！？母上危ないです！？にゅぶ！？ブレイドがまだ出てます～～！？」

「え？あっ！？ごめんなさい、レイ。あまりにも綺麗だったからつい♪」

「つい♪て、ブレイドで怪我したらどうするんですか？それと父上

いつまでそうやって固まっているつもりですか？」

「ん？あぁ、すまない。金色のブレイドなんて見た事が無くてな。つい驚いてしまった」

私は母上の返答に呆れつつ父上に声を掛けて目を覚まさせた。

「父上にも何故金色なのか解りませんか？」

「解らん」

父上ぇ～、もうちょっとは考えてから答えて下さい。ちょっと適当過ぎませんか？・・・はぁ～しかし父上にも解らないとは困りましたね。系統の方も恐らく解らないと思うが、一応聞いておこう。

「父上、私が何の系統か解りますか？」

「それも解らん」

系統も解らないとなると、まずいな。これではいきなり『プラン』の変更が必要かもしれない。そう考えた私は『プラン』を変更した際、どの様な影響を受けるかを頭の中でシュミレーションし、影響を受けた場合を複数弾き出した後、それらを修正するための最適な手段を頭の中で弾き出していく。

傍に両親が居るのを忘れて。

Ｓｉｄｅ：イオビス

「レイ！レイ！！・・・はぁ～、またこれか。こうなると当分戻ってこないぞ。どうする？カナリア」

「そう言えば、レイが長考する様になったのは書庫の使用許可を出して一か月ぐらい経ったころからですね？」

そう、レイが長考をする様になったのは書庫の使用許可を与えて、約一か月経った頃からだ。私が初めてレイが長考しているのを見た時の光景は何時までも忘れる事は無いだろう。それほど驚いたのだ。レイが居る机の上には、二つの本の山が出来ていて、その間にレイが一冊の本を開きながら考え事をしていたのだ。私はレイに近づき声を何度も掛けたが何の反応もしないため、叩いて目を覚まさせようとした時に、ふと開いている本が目に入り、気になった私はその本を取り、何の本かを確かめた。内容は軍事に関する物で決して三歳児が読む物ではない。私は持っていた本を置き、二つの山積みにされている本を一冊ずつ確認していった。置かれていた本は、魔法・農業・経済・行政・軍事・歴史・宗教等、種類は様々で、さらには『場違いな工芸品』も複数混ざっていた。私はため息を吐きつつ、私が居る事も気づいていないレイを見た。普通の子供なら少し喋れる様になり、親に甘えたり、遊んだりする年齢だが、レイは普通に喋り、字をスラスラと読む事が出来た。書庫の使用許可を与えたのは、絵本に飽きたから小説や魔導書を読みたいのだろう思ったのだが、レイは私の予想のさらに上をいったのだ。

「カナリアはレイの系統は何だと思う？」

「・・・・もしかしたら四系統とは違う新たな系統か、四系統全てかもしれませんね」

「・・・・その可能性が高いかもしれんな」

金色のブレイドが一体どんな意味を持っているのかは明日の訓練で解るだろう。

「・・・・・あれ？父上、母上、どうしたんですか？」

漸く長考を終えたのか、満足そうなレイが私達に声を掛けてきた。
誰のせいでこんな事になったと思っている。

「はぁ～」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

漸く『プラン』を変更した際の修正案を出し終え満足した私は両親に意識を向けると、揃って此方を見ていた。

「・・・・・あれ？父上、母上、どうしたんですか？」

そう言うと、父上が深いため息を吐いた。あれ？何かした？

「父上？母上？何かしてしまいましたか？」

そう言うと、更にため息を吐かれた。

「レイ、あなたまた長考に入っていたのよ」

うへ、またか、『プラン』に関する事を考えると、どうしてもそう成ってしまうのだ。

「その癖は必ず治しなさい。解りましたね、レイ？」

「はい、母上」

「レイ、系統が何なのかは、明日の訓練で確かめる。いいな？」

私は、はい、と返事を返すが内心は今直ぐ自分の系統を調べたいと思っていた。

「このマジックアローを教えたら今日の訓練は終了だ、ロックとアンロックは屋敷に戻って一人で訓練しなさい。では≪マジックアロー≫」

父上はそう言いながら、二十メイルほど離れた場所に魔法で的を作りだしマジックアローを唱えると、杖の先から茶色い矢の様な物が放たれ、的に刺さった。

「マジックアローは杖の中に矢を作り、それを放つ様なイメージしなさい」

「（矢はイメージ出来るけど、私には銃弾か砲弾の方がイメージし易い。・・・・杖の中に精神力を限界まで圧縮した砲弾を作り、それに回転を付けて撃ち出す！！）≪マジックアロー≫」

私の杖から放たれるマジックアロー、もちろん砲弾をイメージしたのだ。その威力は作られた的を木端微塵に破壊した。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

沈黙、今この状態を示す最適な言葉はこれしかないだろう。私はイメージが違うだけでここまで威力が違うのかと驚き、父上と母上はどんなイメージをしたらこれほどの威力が出るのかと唖然としいる。

どう言い訳しようか

第七話　神と喧嘩と才能とバグ認定と贈り物と睡眠不足

マジックアローと言う名のマジックキャノンを撃った後、当然の様に両親からの質問攻めに合い、何とか言い訳し納得してくれたが、疲労困憊になった私を屋敷で待っていたのは残っているロックとアンロックの訓練だったが、当たり前の様に一回ずつで終わらせ、自室に戻った。

この部屋は私に書庫の使用許可が出されてから二日ほど経った日に、割り当てられ、それ以来『プラン』は、この部屋で練っている。

私は机の上に杖を置き、ベットに寝転がりながら目を瞑り、訓練中に弾き出した幾つもの修正案を再確認し、特に問題が無い事が解ると、精神的に疲れていたのか眠気に勝てず、服を着たまま寝てしまった。

「・・お・・ん・・！」

ん～～だぁれぇ？もう少し寝たいのにぃ～～

「こ・・・！！」

うっ・・・・うるさい。

「いい加減、起きんかーーー！！！」

「だぁーーーーー！！！人が気持ちよく寝てんのに、ギャーギャーギャーギャーウルセェんだよ！！！ぶち殺すぞテメェ！！！」

「何じゃとーーーー！！！ワシが直々に起こしてやったと言うのに！！！」

「喧しい！！！ヨボヨボ爺のガラガラ声で起こされるより、ピチピチ美女の綺麗な声で起こされたいわ！！！！」

「それにはワシも賛成じゃ！！！だがしかし、ワシは神じゃ！！！少しは敬え！！！！！」

「断る！！！」

「かっこよく断る奴があるか！！！」

「文句あかァ！！！駄目神！！！」

「有り有りじゃ！！！小僧！！！」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・すぅ～～・・・・・」」

その後、私が転生する直前に居た空間は、神と人間が口汚い言葉を使い、お互いに罵り合う空間へと変わった。

その数時間後、そこには力尽きて地面に倒れている馬鹿二人が居た。

「げほっ！・・・・で？何故、私を・・・・ここに呼んだんだ？・・・ごほっ！」

「ヒィーヒィー・・・うっげぇ！・・あぁ、それはな・・お前が上手く・・・おえぇ・・・ハルケギニアで・・・生きているか・・・ふぐぅ！・・聞くためじゃ・・・おえぇぇ」

心配してくれたのは嬉しいが、私は今、あなたの方が心配だ。

「・・・あぁ、私は幸せだよ・・・」

「ゴッホッ！・・・それは何よりじゃ・・・」

私は気になっていた事を神に聞いた。

「・・・あなたは、私に三つ以外の力を与えましたか？」

私がそう言うと、神は眉をひそめながら私の顔を見た。

「・・・いや、三つしか与えて無いが、それがどうかしたか？」

「実は、『全知全能』をＯＦＦにしていたんですが、コモンマジックを全て一回で成功したんですよ。普通は二、三回失敗するはずですから」

そう言うと、神様が呆れた様に深いため息を吐いた。

「それは君自身の才能だ」

「魔法の？」

「魔法だけでは無いわ！！お前が今までして来た事を思い出せ、バカもん！！二種類のガーゴイルの設計とその術式、『震電』を再設計した『ファーン』と、『陽炎型』を再設計した『アカツキ級』、そして、極めつけにそれらに搭載する魔導エンジンと魔導機関の設計と制御術式じゃ！！！この制御術式を作るのに、普通の人間なら百年ぐらい掛かる。そして、ワシでも二年ほど掛かるのじゃ！！！それをお前はたった二日で完璧な術式を完成させたんじゃぞ！！！」

「え？『全知全能』で性質や特徴以外も調べたら簡単に出来たけど？そんなに難しい物なんですか？」

「・・・・・バグキャラに認定じゃな。・・・おぉ～忘れておったわ、実は君に渡したい物があるんじゃ」

神様はそう言うと懐から白い指輪を出し、私に渡してきた。その指輪には、宝石等は付いておらず、指輪全体が純白だが、内側には何かの術式が組み込まれている事が解った。

「これは？」

「それはワシが作った神具じゃ。それを指に嵌めて『換装』と言えば甲冑を装備できる。これなら急に戦闘が起きても安全じゃろ。ちなみに甲冑は、君に最適な術式と形状にしたからある程度、戦闘能力を強化する事が出来る。きっと君も気に入るだろう」

「ありがとうございます」

私は神様に感謝の言葉を言いながら、右手の中指に指輪を嵌めた。

「これで要件は全て済んだから、ハルケギニアに戻すぞ？」

そう言うと、光が私の視界を埋め付くした。

目を覚ますと私は、ベットの上に服を着たまま寝転がっていた。私は無言で腕を挙げ、右手の中指に嵌められている指輪を確認した後、腕を下ろし呟いた。

「・・・・・眠い・・・・」

第八話　純白の甲冑と血の海と混沌

「・・・・・・・・・・・・・・眠い」

睡眠不足、今の私の状態を表すには、最適な言葉だ。神様との会話（言い争い？）が、終わってハルケギニアに戻って来たのだが、全く疲れが取れておらず、寝た気がしなかった。

そんな状態でありながら、私は神様に貰った神具を実際に使い、どの様な甲冑なのか確認するために『換装』と唱えると、目の前の姿見には白く綺麗な甲冑を身に纏った私が写っており、それは何処をどう見ても『セイバー・リリィ』にしか見えず、睡眠不足が原因の頭痛がさらに酷くなった。

実は私は身体全体が女性の様にかなり細く、それに女顔も合わさり、女装がかなり似合ってしまうのだ。この前、母上に捕まり強制的に女装させられた時は、屋敷に居たほとんどの者が血の海に沈み、一日中鉄臭かったのは記憶に新しい。

私が現実逃避していると、突然目の前に手紙が出てきたので、床に落ちる前に掴み、書かれている内容を確認した。

『

この手紙を読んでいると言う事は、神具を使用したのじゃろうな。
その甲冑は君の戦闘能力を約三倍ほど強化する事ができる。だが、
今の君は普通の子供と変わらないから、それほど強くは無い強くな
りたければ鍛錬を欠かさぬ事だ。それとスカートの下は短パンにし
ておいたぞ。

そして、最後にワシの感想を書かせて貰うぞ。

良い物が見れた。

神より

』

読み終えた次の瞬間に手紙を破り捨てた私は決して悪くないだろう。

そして、急いでスカートの上から手で短パンかどうかを確認した。

「うん、ちゃんと短パンだ。・・・・なんで短パンを履いているだけで涙が出てくるだろうか？」

そんな事をしていると、トントンと部屋の扉をノックする音が部屋に響き、母上が扉を開き入ってきた。

さぁ、ここで諺（ことわざ）のおさらいだ。

『泣きっ面に蜂』　　不運や不幸が重なる事

今の現状を再確認してみよう。

『セイバー・リリィ』の甲冑を身に纏った私。

以前、私に強制的に女装させ、血の海沈んだ人達の内の一人、母上。

見つめ合う二人。

一人は諦めた様な目をし、もう一人はキラキラと子供の様に目を輝かせている。

もちろん、前者が私、後者が母上だ。

そして母上？何故昨日のブレイドの時より目を輝かせ、手をワキワキとさせながら私に近づいて来るんですか？

その後、オーシア家の屋敷は血の海となった。ちなみに今回は以前とは違う事が起こった。それはほとんどの者ではなく、全員が血の海に沈んだ事である。

「何？この混沌（カオス）」

第九話　系統魔法と修羅とプライド

私は今、父上と共に屋敷の鍛錬場に居り、系統魔法の訓練をするはずだったのだが、どうもそれは無理そうだ。

「・・・・・・・・父上？」

私は遠い目をしながら父上を見て、言った。

「・・・・・・・・何だ？」

父上は私の声に返事をした。

「・・・・・・・・今日の訓練は、中止にしましょう」

私はそう父上に提案した。

「・・・・・・・・何故だ？」

父上は不思議そうに私を見る。

「・・・・・・・・本当に分からないのですか？」

「・・・・・・・・分からん」

「・・・・・・・・本当に分かりませんか？」

私はもう一度確認した。

「・・・・・・・・分からん」

どうやら今の父上は、自分の体調も分からないらしい。

「・・・では率直に言わさせて頂きます。父上の体調が、あまり良くなさそうだからです」

「・・・・・・・・そんな事は無い」

「自分の脚が生まれたての子鹿の様にプルプルと震えているのが、分からないんですか？・・・・・はぁ～、魔法の呪文は全て頭の中に入っています。ですから今日はもう休んでください。私がどの系統魔法なのかは後でしっかり父上に知らせますから」

私がそう言うと、父上は無言で頷き、覚束ない足取りで屋敷に戻って行った。
私は帰って行く父上を見ながら呟いた。

「心配してくれるのは嬉しいが、あまり無理はして欲しくないな」

まぁ～、父上が体調を崩した元々の原因は自分に有るのだが。

「さて、初歩的な呪文から始めましょうかね。呪文は土の『アース』、水の『ウォーター』、火の『ファイヤー』、風の『ウィンド』の四つ。・・・・・・・まずは父上の系統の土から始めるとするか」

魔導書にはアースは、自分の周囲の地面を操る魔法と書かれており、土系統の基本だ。

「ん～、イメージは目の前の地面が少し盛り上がる感じで・・・≪アース≫」

すると、地面が盛り上がり始めたが、それは私の身長と同じぐらいの高さで止まった。私はその光景を見て、自分に系統魔法の適性が有る事が分かり安堵し、盛り上がった地面を元に戻すために再びアースを唱え、地面を元に戻す。さて、次は母上の水だ。

「ウォーターは杖の先に空気中の水分を集め、そのまま維持する感じかな？・・・≪ウォーター≫」

そう唱え、杖を空中に突き出すと、杖の先に直径一メイルほどの水球が出来た。

「・・・水系統の適性も有り、と」

土と水は、父上と母上の系統なので、この二つに適性が有る可能性は昨日の時点で予想はしていたが、問題は火と風の系統だ。この二つは土と水の系統に、相反するため一般のメイジなら、この二つに適性はほとんど無いが、私は神様にバグキャラに認定されたから、どうなるかまったく分からない。そのため、火の系統から確認する事にした。

「え～と、イメージは杖の先から炎を出す感じで・・・≪ファイヤー≫」

燃える物が周りに無いか確認し、杖を突き出して呪文を唱えると、杖の先から炎が出たが、イメージに問題が有ったのか、火炎放射の様になってしまい、慌てて魔法を中断した。

「ふむ、火の系統も適性有りと、しかし、イメージの仕方は要練習だな」

魔法は簡単に人を殺す事が出来る力だ、一度でも魔法の規模を間違えると、大変な事になる場合も有るからな。さて、気を取り直して最後に残った風のウィンドだ。

「・・・風は他の三つとは違って、目に見えないからイメージが少し、難いな・・・・・風、風・・台風の時に吹く風で良いかな？・・・・≪ウィンド≫」

後の私はこの時の事を思い返す度に、『あの時、普通の風をイメージすればよかった・・・』と後悔するが、そんな事を知らない私は空中に杖を突き出し、呪文を唱えた。
すると、杖を向けた方向に、凄まじい暴風が吹き、広範囲にその爪痕を残した。

「・・・・・・あ～、ここが鍛錬場で良かっ・・・・・・・」

私は気づいてしまった、鍛錬場の近くに有る花壇の花が全滅してい

る事に。その花壇は花は母上が植え、とても大切に育てて物だ。

「ヤバい！ヤバい！！ヤバい！！！ヤバい！！！！」

この場合はどうすれば・・・・よし、ここはひとまず逃げ「レイ」っ！！！

私の後ろから声が聞こえ、震えながら振り向くと、そこには修羅が降臨しており、笑顔（目は決して笑っていない）で私を見ていた。

「・・・言い残す事は？」

「・・・死にたくないです」

私がそう言うと、母上は二つの選択肢を出してきた。

「では、レイに選択肢を与えます。一つ目はこのまま処、・・・お仕置きを受ける。二つ目はあの白い甲冑を身に纏って、今日から一週間過ごす。さぁ～、レイ、どちらにしますか？」

母上、私は男です。どちらを選ぶかは既に決まっています！！

「『換装』」

プライド？何それ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6882w/

ゼロの使い魔～純白の姫騎士～

2011年10月5日02時22分発行